20180624中野教会「聖書の学び」---縮小版

　　　　　　「**いつまで、あなたは聞いてくださらないのか」**

聖書箇所：ハバクク書　1:2-4、2:1-4、3:16-18

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

　ハバクク書は預言者ハバククが語った言葉です。この預言書が書かれた時代はBC606-604と言われています。預言者としてはエレミヤと同時代になります。預言の内容はともかく、エレミヤは当時から偉大な預言者として扱われていましたが、ハバククはそうではありません。一介の祭儀預言者であったろう、と推測されます。しかし、彼の提示した問題は時の時代状況の下では実に切実な問題でした。1:2には「主よ。私が助けを求めて叫んでいますのに、 あなたはいつまで、聞いてくださらないのですか。 私が「暴虐」とあなたに叫んでいますのに、 あなたは救ってくださらないのですか」とあり、いわば、神様に対し抗議をしています。

若干遡って、ユダ王国が政治的・軍事的にどのような立場を採って来たか見てみると、ユダ王国は、アッシリヤ、エジプト、新バビロニアなどの列強に振り回され、国の存続をはかるのに汲々としていました。このなかで、イザヤ、エレミヤのような預言者はどちらに組するか、と言うことではなく、ヤハウェ―信仰に忠実であれ、と説きますが、政治指導者はあっちについたり、こっちについたり、右往左往していました。列強に挟まれた小国のありかたを考える上で参考になります。戦後日本は完全に一方に傾斜し、事実上、アメリカの従属国家として生きてきました。経済的には繁栄しました。過去のユダ王国の歴史を安易に現代の日本に当てはめるのは良くありませんが、イザヤ、エレミヤの精神を考慮すると、戦後日本がとった道は、預言者の心に叶ったものではなかったのではないか、という思いにさせられます。

　このような中、エホヤキム王の時代に先ほどの叫びが発せられるのです。「私が「暴虐」とあなたに叫んでいますのに、 あなたは救ってくださらないのですか」という叫びです。3節では「なぜ、あなたは私に、わざわいを見させ、 労苦をながめておられるのですか。 暴行と暴虐は私の前にあり、 闘争があり、争いが起こっています」と言っています。3節には「暴行」と「暴虐」が出てきます。実は、2:17には「レバノンへの暴虐があなたをおおい、 獣への残虐があなたを脅かす。 あなたが人の血を流し、 国や町や、そのすべての住民に 暴力をふるったためだ。」という表現がでてきます。ここでは、「暴虐」「残虐」「暴力」です。日本語では色々な訳になっていますが、ヘブル語では「hama:s」と「so:d」の二つです。

私は、今まで、この「暴虐」を他人事としてみてきました。現代ではアフリカか中近東の問題くらいに思ってきました。朝鮮植民地政策、中国侵略戦争での「暴虐」は軍のやったこととはいえ、民族としての責任は逃れられません。お金を払って、終わりなどという態度は神様がゆるして下さる、とは思えません。何百回悔い改めても血塗られた歴史は消えることはありません。このような問題に、安易に主イエスの救い、を持ち出してはなりません。

　5-11節はこれに対する神様の応答です。6節をご覧ください。「見よ。わたしはカルデヤ人を起こす。強暴で激しい国民だ。これは、自分のものでない住まいを占領しようと、地を広く行き巡る」とあります。カルデヤ人とはバビロニア人のことです。不正義のユダ王国を裁くためバビロニアを送るというのです。8節では「その馬は、ひょうよりも速く、日暮れの狼よりも敏しょうだ。その軍馬は、はね回る。その騎兵は遠くからやって来て、鷲のように獲物を食おうと飛びかかる」と言われています。このように神様が異教徒の王をイスラエルの不信仰を裁くために遣わす、という考え方は旧約聖書に特徴的な思想です。神様は悪さえその計画実施の手段とする、ということです。

　12節から1章の最後までは再度ハバククの叫びです。13節では「あなたの目はあまりきよくて、悪を見ず、労苦に目を留めることができないのでしょう。なぜ、裏切り者をながめておられるのですか。悪者が自分より正しい者をのみこむとき、なぜ黙っておられるのですか」と言っています。おそらく、カルデヤ人の残虐さ、そして彼らと一緒に不正をはたらく輩を前に、このような嘆きの叫びしか出てこなかったのでしょう。さきほどの「神への語りかけ（その一）」と今の（その二）とをあわせ、このハバククの叫び声をもう一度みてみましょう。これらは「語りかけ」などというなまやさしいものではなく、「叫び」であり、むしろ「抗議」と言っても良いでしょう。これで思い出すのはヨブ記ですね。義人ヨブが何の言われもなく、塗炭の苦しみに出会う物語です。最初は、「私たちは幸いを神から受けるのだから、わざわいをも受けなければならないではないか」と信仰を維持していたのが、我慢できず、とうとう神への「抗議」に代わるのです。このような「理不尽な苦悩」のテーマはハバクク書とヨブ記に通底・底で繋がっています。ヨブ記はBC5-3cの著作ですから、ハバククのあと数百年後に、異邦人の話として復活している、といえます。そのほかにもハバククと類似の疑問を神にぶつけている文書がいくつかあります。詩篇のいくつかです。「個人の嘆きの詩」に分類されている中の詩です。まず、詩編6篇。6:3「私のたましいはただ、恐れおののいています。 主よ。いつまでですか。あなたは。」という疑問が出されています。次に詩篇13篇。13:1「主よ。いつまでですか。 あなたは私を永久にお忘れになるのですか。 いつまで御顔を私からお隠しになるのですか。」とあります。こう見ていくと、疑問の提示ははるかにこえ、抗議と言うには不適切、しかし、絶望に似た叫び、として詩篇22篇が思い出されます。22:1「わが神、わが神。 どうして、私をお見捨てになったのですか。 遠く離れて私をお救いにならないのですか。 私のうめきのことばにも。」です。これは、主イエスの十字架上の言葉です。マタイ27:46「三時ごろ、イエスは大声で、「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」と叫ばれた。これは、「わが神、わが神。どうしてわたしをお見捨てになったのですか」という意味である。」とあります。詩篇22編は後の方に神賛美がでてきますが、主イエスはそこまで行かないうちに息が絶えてしまったのであり、絶望の言葉と理解するのはおかしい、という説もありますが、私は賛同しがたいです。それならなぜ、主なる神は、その神賛美のところまで生きながらえらせなかったのでしょう。やはり、神からの完全遮断の言葉である、と思います。これこそ、「義人の苦難」の最後の姿でしょう。

　先日、ある、キリスト教平和団体の雑誌を見て居ましたら、辺野古基地反対運動をしている牧師が、「主よ、いつまでなのですか」という一文を書かれていました。内容はこの聖書箇所を解き明かすものではなく、もっぱら、辺野古基地建設が横暴に進められていることへの抗議でしたが、彼の気持ちとしては、このハバククの心だったのだと思います。

　2章の最初は再び神の応答です。2:2-4をもう一度、お読みします。「主は私に答えて言われた。 幻を板の上に書いて確認せよ。 これを読む者が急使として走るために。/この幻は、定めの時について証言しており、 終わりについて告げ、 まやかしを言ってはいない。 もしおそくなっても、それを待て。 それは必ず来る。遅れることはない。/見よ。彼の心はうぬぼれていて、まっすぐでない。 しかし、正しい人はその信仰によって生きる」とあります。そして「それは必ず来る。遅れることはない」と言われています。この「おそくなっても」と「遅れることはない」というのは矛盾していることを言っているように見えます。しかし、この２つは異なるヘブル語がつかわれています。あえて訳し分けると、“時間がかかることはあっても躊躇はない”とでも言えるでしょう。この世の時間でみれば遅れているように見えるが確実にまっすぐ来るのだ、と言っています。新約の時代にあっても「主の御前では、一日は千年のようであり、千年は一日のようです」と言われています。そして4節で、悪事を働き神の義をないがしろにしている者は必ずその心がうぬぼれ高慢になり、神に対しまっすぐではない、と言い、最後に有名な「正しい人はその信仰によって生きる」という言葉で締めくくられます。

この「正しい人はその信仰によって生きる」の言葉は、新約聖書で、3箇所引用されています。ロマ書1:17「なぜなら、福音のうちには神の義が啓示されていて、その義は、信仰に始まり信仰に進ませるからです。「義人は信仰によって生きる」と書いてあるとおりです」とあり、ガラテア書3:11には「ところが、律法によって神の前に義と認められる者が、だれもいないということは明らかです。「義人は信仰によって生きる」のだからです」とあります。更にヘブル書10:38では「わたしの義人は信仰によって生きる。もし、恐れ退くなら、わたしのこころは彼を喜ばない。」とあります。ロマ書、ガラテア書では律法の業（わざ）と対比させた形で使われています。ハバクク書では「悪人と義人」の対比で使用されていたものがパウロにおいて「律法と信仰」の対比で語られていることになります。ヘブル書での使い方は忍耐を勧める文脈で引用されむしろハバクク書2:3との関連で引用されているようです。

実は、ヘブル書での引用はハバクク書での表現とかなり違っています。ヘブル書では「もうしばらくすれば、 来るべき方が来られる。おそくなることはない。/わたしの義人は信仰によって生きる。 もし、恐れ退くなら、 わたしのこころは彼を喜ばない。」となっています。ヘブル書はBC2cに出来た旧約聖書のギリシャ語訳から引用されており、このギリシャ語訳がヘブル語原典と異なった表現になっているからです。まず一つの違いは必ず来る、というのがハバクク書では最後の審判の時であるのに対し、ギリシャ語訳、ヘブル書では「来るべき方」となっており、救い主の到来のことを直接言っています。ハバクク書が書かれた時点では、まだ救い主の到来を具体的に待ち望むという信仰にまで成熟はしていませんでした。しかしギリシャ語訳の段階では最後の審判を待つということはメシアの到来を待ち望むことである、とはっきり意識され、新約の時代に入り「来るべき方」が既にいらっしゃりそして近い将来に再来する、という確信となっていったのです。

　ハバクク書における「義人は信仰によって生きる」はその直前の節で救いの時、裁きの時を待つことが命じられていることが言われていることからして、この義人は「神の約束に信頼を置く者」の意味で使われています。近い将来において神の約束が必ず実現する、という確信に根拠を持つものです。一言で言えば「希望」です。神の約束に希望を置く、ということです。イスラエル信仰の根幹です。イスラエルの国歌（国の歌）は「hatiqvah」といますが、「希望」に「ha」という定冠詞が付いた言葉です。英語で言えば「The Hope」です。日本語の「希望します」のような挨拶言葉ではありません。今は苦難のどん底にあるが、神の救いの約束に信頼し、その希望のみをつてとして生きる、ということです。ホロコーストにおけるガス室に送られたユダヤ人が「われ信ず」と歌いつつその最終処分場に向かった、という話を読んだことがあります。そのことのみによって、彼らは主なる神により、義人と認められたのではないか、と思います。以前、神学校の時、過去の現在化、将来の現在化について聖書のいろんな箇所を調べ、報告書を書いたことがありますが、将来のことがどうやって現在の事となるのか、というと言う問いに対する私の結論は「希望」に対する確信である、ということでした。神の約束に対する「希望」しかないところで、その神が今ここにともにおられる、というのが将来の現在化なのです。私たちキリスト者も「マラナ・タ」と言う時、その希望への確信を表明しているのです。イスラエル信仰・ユダヤ教・キリスト教の底流に一貫して流れる基本です。あえて言えばイスラム教も加えることができるかもしれません。

2:5から2章の終わりまでは「滅亡の預言」です。「わざわいだ」という言葉が5回繰り返されています。これはヘブル語で「ho:」という感嘆詞で「ああ」という嘆きを現しています。この「わざわいだ」と言われている箇所をみると①泥棒・搾取者②不正蓄財者③軍事占領者④他人を侮辱する者、そして⑤偶像崇拝者です。

3章の最初は「ハバククの祈り」です。そして13節、「あなたは、ご自分の民を救うために出て来られ、あなたに油そそがれた者を救うために出て来られます。あなたは、悪者の家の頭を粉々に砕き、足もとから首まで裸にされます」とあります。油注がれた者は「mashi:aha」であり後にメシヤ・救い主となっていった言葉です。ここでは王、祭司のことであり民を代表する者のことを指しています。イスラエルの民とその頭を救うために神が現れる、というのです。それぞ救い主です。メシヤです。油注がれた者「mashi:aha」が救い主・メシアを指す言葉になって行く所以がここにあります。

そして16節から最後までが神を賛美する声になります。

茲に至って、「神への抗議」がなぜ「神への賛美」に至ったのか、その転換点はどこで、どうしてひきおこされたのか、というハバクク書の中心的問題に至ります。このテーマはヨブ記に受け継がれています。詩篇22編の場合にも同様の疑問があります。ハバクク書のこの転換を示す部分をさがすと、3:13「あなたは、ご自分の民を救うために出て来られ、 あなたに油そそがれた者を救うために 出て来られます。」のところです。このあと、神が暴虐者を打ち砕きます。そして3:18「私は主にあって喜び勇み、 私の救いの神にあって喜ぼう。」に到ります。“神がこの地上に具体的に現れること・神顕現”がその転換を導く鍵です。ヨブ記をみてみます。38:1で初めて、神なる「主はあらしの中からヨブに答えて仰せられた。」とあり、40:1で重ねて「主はさらに、ヨブに答えて仰せられた。」と言われています。「答える」は神顕現の代表的表現です。神を「見た」とか神の声を「聞く」というのも神顕現です。この神顕現のあと創造主として全世界の支配者としての全能の神の業が示されています。ヨブの場合も「神顕現」が転換点になっています。詩篇22編の場合は22:11「どうか、遠く離れないでください。」と嘆願がのべられ更に22:19「主よ。あなたは、遠く離れないでください。」と繰り返され、22:23「主を恐れる人々よ。主を賛美せよ。」に到ります。神が共にいらっしゃることが転換のポイントです。この「神がともにいらっしゃる・エンマニュエル」とは「神顕現」により齎される状況です。「神共に居まして」と讃美歌で歌われることばです。これらをみてみると、転換を引き起こしているのは神顕現とそれに続く「神共にいます」という確信です。すべてを神にゆだねる信仰に達するので、罪の告白とか神賛美の言葉を発することができるようになるのです。新約の民は、主イエスの言動により神顕現を見聞きした者であり、復活の主が霊のからだをもって常に我々と共にいらっしゃるという信仰が苦難に耐え、主を賛美する力となっているのです。ユダヤ人ラビが書いた『ユダヤ人の生き方』と言う本があります。このなかで「私たちは、神の恵みを信頼します。ユダヤ教は、私たちが願ったものを手に入れた時ではなく、神が近づかれた という意識を与えられる時に、祈りは聞き届けられたと理解します。病人の祈りは、病がなくなることによってではなく神が近づかれたこと、つまり、病は神の罰ではなく神が彼を見放されたことでもないという確信の意識を得ることによって聞き届けられます。」と言っています。この「神が近づかれた」というのが“神顕現＋インマニュエル”だと思います。

神顕現と言う時、ハバククの場合は具体的には、主の言葉による救いの希望の確信であったろうと思われます。希望が、神の約束であるという確信を通して未来の現在化が起きているのです。しかし、主イエスの弟子たちは、救いの希望が具体的に人となってこの地上に現れた方を見たのです。そして私たちクリスチャンはその弟子と共にある者とされたのです。主イエスを見、御話しを聞き、そして十字架と復活を見た弟子とともにある者です。旧約の預言者は救いの希望の中に生きるのですが新約の民は現実にその救いを見た者に連なる者なのです。一言祈ります。

（ご在天の父なる御神様、今日のひと時を感謝致します。ハバククの神への抗議から神への賛美に転換すること見、私たちの信仰の原点を確認致しました。主にすべてを委ね、主が共にある、という信仰に生かさしめてください。我らの主、イエス・キリストのみ名により祈ります。アーメン）